

第2回公開講座「アカトンボが危ない！」

事前打合せ結果と開催方針

1. 事前打合せ概要

日時:2021.9.7 19:30~20:40

会議方式:ZOOMミーティング 主催:松沢 PC

出席者(五十音順・敬称略):苅部・中田・星・松沢

2. 9/7 打合せでの協議・決定事項

9/7 打合せで決定した事項等を以下に整理した。

① 20210113 市民部会での意見

- ・ ネオニコチノイド系農薬の公開講座実施について、令和2年度1月13日に実施した矢作川流域圏懇談会市民部会WGでの議事録のうち、ネオニコチノイド系農薬に関係する部分を抜粋し、苅部氏に報告した。打合せで説明した資料を後ろに添付した。
- ・ 市民部会の意見の根本は、「現状を知ってほしい」ということである。公開講座を通じて、矢作川流域圏だけではなく、流域に住む方々に、農薬の現状を知ってもらうということが公開講座の目的である。

3. 矢作川流域圏懇談会 第1回公開講座（2021.7.31実施）の状況

2021.7.31開催の第1回公開講座の状況を報告した。第1回公開講座の状況を以下に記した。

内容	
開催日時	令和3年7月31日（土） 15:00~17:00
参加人数	延べ98名（ZOOM参加者：77名、会場参加者：21名、事務局含む）
参加地域	13都道府県（北海道、山形県、茨城県、山梨県、千葉県、東京都、静岡県、愛知県、三重県、岐阜県、大阪府、兵庫県、福岡県、）
印刷部数	・各地域部会（山・川・海）WGにて配布 （各300部ほどずつ）
チラシ配布先	・子どもの本専門店 ・岡崎市図書館 ・市民交流センター ・愛知・川の会 ・全国川ごみネットワーク ・22世紀奈佐の浜プロジェクト ・三河淡水生物ネットワーク 等

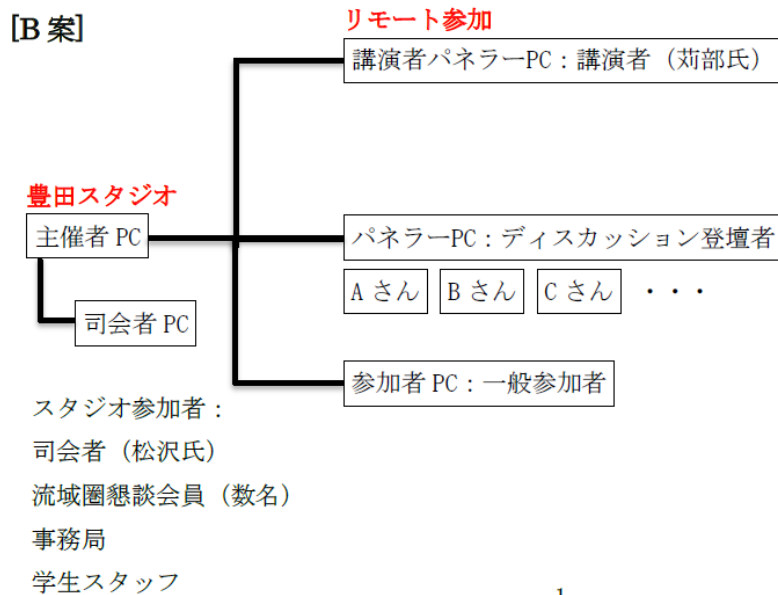
4. 第2回公開講座の実施日時について（協議・決定）

協議の結果、以下の日時で第2回公開講座を実施する。

■第2回公開講座：2021年11月27日（土） 15:00~17:00

5. 第2回公開講座の方式（協議・決定）

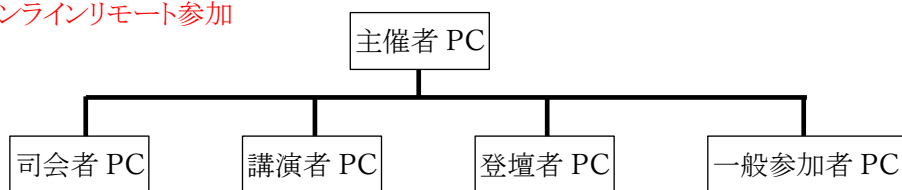
第2回公開講座は、ZOOM ウェビナーによるリモート講座とし、以下の方式で実施する。



1

- ・ 豊田市にスタジオを設置し、主催者 PC を配置する。 司会者、流域圏懇談会員、事務局、学生スタッフはスタジオでの参加。
- ・ 講演者、ディスカッション登壇者は「パネラー」としてリモート参加。 一般参加者は「参加者」として参加。
 - コロナの状況により、講演者はスタジオ参加もありうる。
 - コロナ緊急事態宣言が発令されている場合は、豊田スタジオ参加者も含め、全てリモート参加となる可能性もある。その場合、学生スタッフも用意しないことになる。このケースも C案として想定しておく。

[C案] 完全オンラインリモート参加



6. 公開講座のプログラム案（協議）

① 公開講座プログラムの時間配分（案）

15:00～15:05 第1部 挨拶：矢作川流域圏懇談会 光岡氏

15:05～16:10 第2部 ネオニコチノイド系農薬講演

- ・ 松沢：講演者・講演内容の紹介
- ・ 荻部：アカトンボが危ない いま、水の中で何が起きているのか？

16:10～16:55 第3部 ディスカッション

*ディスカッションの進め方については2に示した。

16:55～17:00 おわりに：矢作川流域圏懇談会 山本(薫)氏

② ディスカッションの進め方

(1) ディスカッションの考え方

- ・ ある程度テーマを決めてディスカッションを進める。
- ・ テーマに沿って話題提供できる人をパネラーとして登壇させる。パネラー人数は、多くて3～5人程度。提供された話題について、講師がコメント、パネラーとの意見交換。
- ・ 進行は司会の松沢。話題の振り分け、テーマの進行・時間管理などを司会が行う。

(2) ディスカッションのテーマ（案）

① 各種生物群の現状とネオニコチノイド系農薬

↓

② 農業、市民生活とネオニコチノイド系農薬

↓

③ 参加者等からの質問への回答

↓

④ まとめ

- ・ 司会者がディスカッションのまとめを行う。
- ・ 講演者によるまとめの言葉。

(3) パネラー（登壇者）候補について

(2)のディスカッションのテーマにおける話題提供者（＝登壇者）の候補を以下にあげた。ディスカッションのテーマと併せて協議したい。

■ 農業、市民生活関係での話題提供者

山本薫久氏（荻野 NPO 結び家 矢作川流域圏懇談会）→了承済

沖 章枝氏（水と緑を守る会・岡崎 矢作川流域圏懇談会）→了承済

■ 生物関係での話題提供候補者

- ・ トンボ類関係：吉田雅澄氏 or 清水典之氏
- ・ 鳥類関係：高橋伸夫氏（西三河野鳥の会 矢作川流域圏懇談会）→了承済
- ・ ミツバチ関係：矢作川研究所 or 山本薫久氏
- ・ 水生昆虫関係：内田臣一氏（愛知工業大学 矢作川流域圏懇談会）

➤ 登壇者が多すぎると話しが分散すると思うので、適度な人数に絞るほうがよい。

➤ トンボ関係については、松沢より吉田氏・清水氏へ参加の可否、PC 環境について確認する。吉田氏は矢作川水系のトンボの状況を把握している。清水氏は愛知県のトンボの消長について把握している。

➤ 鳥類関係については、高橋氏に海鳥の減少等について話題提供していただく。

- ミツバチ関係は要確認。矢作川研究所のミツバチ研究について情報を収集し、公開講座での話題提供の可能性を検討する。養蜂関係なら山本薫久氏が話題提供できるかも。
- 水生昆虫については、愛工大の内田氏に話題提供できるかどうかを確認する。
- ディスカッションでは、登壇者からの発言がテーマから外れたり、拡散しないよう司会者がコントロールする。登壇者への事前調整・念押しが必要かも。

1. 参加者からの質問と対応について

<質問への対応案>

- ・ 参加者 Q&A 書き込みの整理はスタッフが行う。
- ・ スタッフは整理したペーパーを司会者（松沢）に渡す。
- ・ 司会者（松沢）は、ディスカッションで質問事項についてテーマを勘案して選択発表。講演者（苅部）あるいはパネラーが質問への回答・コメントを行う。

7. その他

① Youtube 配信における注意事項

- ・ 講演では、未発表データを含むことから、後日の動画配信では編集が必要になる。CWP に確認する。拡散すると困るデータについては、声だけとし、スライドを見えなくするなどの処理を検討。
- ・ ディスカッションは会話を基本とし、未発表データ等の表示はなしとする。

② 講師謝金について

- ・ 苅部氏の「主任学芸員」に見合う謝金額を事務局で設定する。

③ 講演データ(PPT)について

- ・ 事務局としては、講演の 1 週間前に講演データを事務局に提出していただきたいところだが、今回、リモート講座であることから、前日提供でも可とする。

以上

矢作川流域圏懇談会 市民部会 第1回勉強会チラシ作成会議
議事録 (20210907 抜粋)

■日時:2021年1月13日 14:00~15:20

■場所:豊田市崇化館交流館4階 視聴覚室

■出席者(敬称略):光岡・山本(薫久)・高橋・野田・山本(孝之)・沖

事務局:佐藤・中田(オンライン参加)・手塚・星・松沢

<ネオニコチノイド系農薬に関するディスカッション>

- ・ネオニコチノイド系農薬はイネの育苗箱に撒くものと、散布するものがある。松くい虫やカメムシ防除などで、無人ヘリで空中散布するケースもある。
- ・2年前に豊川の農協の関係で、ネオニコチノイド系農薬の勉強会を行った。勉強会をやった地域は、減農薬を推進している地域で、「農薬を使わない農産物ということで、大いにアピールしましょう」ということを提案した。その時、農協の方が「使っている人と使っていない人がいるから、農協としては困る」という話が出てきた。突き詰めていくと、農協の売り上げで農薬の占める割合が大きいということを正直におっしゃられた。なかなか根は深いのが、やはりお知らせしていかなければいけないと思う。
- ・ネオニコチノイド系農薬の人体への影響を調べている医者のお話しでは、「人体への影響がある」と、具体的な例を出されて説明された。
- ・ヨーロッパのほうでは、何が原因でネオニコチノイド系農薬を規制し始めたか。
 - ▶ヨーロッパの全部の国が止めているというわけではない。2015年あたりから一部の国で規制が強化された。
 - ▶無農薬のほう売れているという話は聞いた。
 - ▶ミツバチの大量死が発端と思う。
- ・10年以上、自然観察会などやっているが、確かにトンボは減っていると感じる。アカトンボの数は激減している。三河地方でかろうじてトンボがいるのは、里山の谷川など。その原因にネオニコチノイド系農薬があるということは、今後認識していきたいと思う。
 - ▶水田に生息するトンボは減少している。また、水田からの流入がある河川では、生息するトンボが減少していると感じる河川もみられる。減少している要因はよくわからないが。
- ・農薬との関係がよく言われるのが鳥で、有機リン系農薬の影響でいくつかの鳥が減少した。現在は回復傾向にある。今回のネオニコチノイド系農薬による影響は、山の鳥にはあまり影響がないのかもしれないが、海の方の鳥が、ちょうど2000年に入ったあたりから減っている。特に、干潟の鳥が減っている。なにか、農薬などが関係しているのかもしれない。
- ・作物については、消費者の感覚から変えていく必要がある。農薬は使わないわけにはいかないと。ネオニコチノイド系農薬は長く残留するので農薬散布回数を少なくできることで普及してきたが、その弊害というのはこれまであまりクローズアップされてこなかった。それが、いろんなところで話題になってきた。こういうのは、みなさんに知っていただくことが重要。今の話しをもとにして、いかに勉強会で発信するかということが課題になると思う。
- ・人体への影響はまだ不確実な点もあることから、「生態系が崩れてくることで、人も危ない」という観

点でもっていくほうがよいと思う。こういった勉強会に市民を導くためにチラシを作成していく。

- ・ これまでの農薬の流れ、農薬と人間、自然の関係などをみながら説明するとよい。現時点では、ネオニコチノイド系農薬と人間との関係は不明なところも多いと思うが、トンボへの影響が出ているということのみながら話をもっていくとよい。
- ・ アキアカネやミツバチなどへの影響は疑問符を付ける必要はないが、疑問符として「川の生物や海の生物にも影響があるのではないか」というようなことは出す必要があると思う。里の農薬が、川や海、生態系全体に影響している可能性があるという事は述べる必要がある。人体への影響も疑問符でよいので触れてもよいかと思う。
- ・ 西三河でも西部の農協は、生態系への配慮に取り組んでいるので、ネオニコチノイド系農薬を減らす方向に持っていけたらと思う。
- ・ 昔は、川の環境などを指標するのはホタルだったが、次の時代に来たのだと思う。
- ・ コメの等級の問題。農協の方が二等米をもう少し高く評価するとか。選別機で斑点米はかなり減るので、それで OK とするなど、コメの見目の評価の厳しさを環境のために緩くするなどの方向が進めばよいかと。生産者として、ネオニコチノイド系農薬が害があるとは思っていないので。
 - ▶ 三河地方の農協の方で「赤とんぼ米」とかを推奨している。生き物のための耕作をいま進めている。
 - ▶ 農業生産者のほうも「赤とんぼ米だと価格がいい」という意識が広がるとよい。「農薬を使って防除すると、かえって残留農薬という点で価値が下がる」というふうになればよいかと。生産者も助かるような価値観を共有できるとよい。
 - ▶ 山部会で「木づかい」をやっているが、「コメづかい」のようなことをやるのもよいかと。
 - ▶ 減農薬なのに育苗箱に農薬を散布することに生産者のほうも矛盾を感じている。調べたら、60 度のお湯に粃を浸けると殺菌ができるからということで、減農薬を進めているところは育苗箱に農薬を散布しないというのは始まっている。